

令和元年5月31日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03528

研究課題名(和文)パブリック・ヒストリー構築のための歴史実践に関する基礎的研究

研究課題名(英文)Basic Study on Historical Practices for Public History in Japan

研究代表者

菅 豊 (SUGA, Yutaka)

東京大学・大学院情報学環・学際情報学府・教授

研究者番号：90235846

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近年、海外の歴史学において存在感を高めつつあるパブリック・ヒストリー(public history)という研究の方向性を日本へ先駆的に導入し、その分野における歴史をめぐる研究方法、実践方法を日本で展開する可能性について検討した。結果、専門的な歴史学者が非専門的な普通の人びと、すなわち「公衆」と協働しながら、歴史や歴史の考え方に意識的、能動的に関与する研究や実践であるパブリック・ヒストリーが、従来の日本の歴史学を変える、大きな原動力となり得ることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで日本で十分に理解されてこなかったパブリック・ヒストリーという、新しい歴史研究・実践の方向性を先駆的に日本の歴史学に導入し、その方法や研究例の具体像を明らかにし、日本での応用可能性を明らかにした点で学術的な意義がある。また、パブリック・ヒストリーは、多様な人びとが多元的な価値を尊重すると共に、同じ立場で協働して民主的に歴史をめぐる交渉しあう点に主たる眼目が置かれており、ともすれば「象牙の塔」に閉じこもりがちな歴史学を広く社会に開放する歴史学の方向性を提示した点で、社会的にも大きな意義がある。

研究成果の概要(英文)：In this study, we took the pioneering step of introducing the research approach known as “public history,” whose presence in the study of history overseas has grown substantially in recent years, into Japan and explored the possibility of developing research methods and practices associated with this approach in Japan. The conclusion reached is that public history, which encompasses a wide range of practices related to historical research wherein academic historians consciously and actively collaborate with individuals who are not academic historians (i.e., the general public), has the potential to become a powerful driving force in changing how history is studied in Japan.

研究分野：民俗学

キーワード：民俗学 公共歴史学 歴史実践 パブリック・ヒストリー Public History

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

研究代表者が専門とする民俗学では、民俗という文化現象の歴史(的変遷)を「実証」的に研究する歴史民俗学が古くより発展してきた。また本研究の中心テーマである「日常実践において歴史とのかかわりをもつ諸行為」、すなわち歴史実践を、人びとが日常生活世界で行う社会・文化現象としてとらえる研究は、民俗学においてこれまでもいくつか散見されるが(久野・時枝 2004、笹原 2009、由谷・時枝 2010 など)、それらは過去に行われた歴史実践に重きが置かれてきた点で、過去、さらに現在から未来へと進行している歴史実践の「いま」に考究の比重を置いている本研究とは大きく観点が異なっている。

文化人類学でも古くから無文字社会の歴史(川田 1976)が究められ、さらに言語論的転回以降の歴史叙述の研究(森 2002)がなされ、近年も歴史人類学的研究が盛んに執り行われている(山口 2011、大場 2014 など)。このような歴史人類学的研究とともに、研究開始当初に研究代表者が強く影響を受けたのが、「歴史する(doing history)」という表現で歴史実践をとらえ、人類学に近接するオーラル・ヒストリーの技法で旧態の実証主義的歴史学に挑戦した歴史家・保苅実の研究(保苅 2004)である。保苅は「神話」「伝承」「記憶」など、通常は歴史学において正統、かつ真正な歴史とはみなされない異端の歴史と、それを語る行為を正当に評価し、歴史実践を専門の歴史家の独占から解放し、研究者自らも人びととともに、歴史実践の過程に参画、介入していく等の重要な論点を提示したが、同氏が早逝したため、それらの論点は本研究の開始当初十分に検討されていなかった。

また、パブリック・ヒストリーに関しては、米国で 1970 年代以降活発化し、公共部門の活動や政策と、歴史学や民俗学、考古学などの歴史系人文学が連動して、それぞれに「パブリック」を冠する研究・実践の方向性が勃興し、1978 年に専門誌 *The Public Historian* が刊行された。また、翌年に全米パブリック・ヒストリー協会(National Council on Public History)が設立されるなど研究活動が活発化した。さらに、現在ではそれは歴史系人文学のディシプリンの壁を越えて、民俗学なども巻き込んで「過去と対話する」社会实践と知識生産として発展を遂げ、世界各国の歴史研究で注目されている。しかし、本研究の開始当初には、このパブリック・ヒストリーという方向性や概念は、日本ではほとんど知られていなかったし、現在もまだその用語の日本での利用は端緒にすぎたばかりである。

### 《文献一覧》

保苅実 2004 『ラディカル・オーラル・ヒストリー オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』御茶の水書房  
久野俊彦・時枝務編 2004 『偽文書学入門』柏書房  
笹原亮二編 2009 『口頭伝承と文字文化 文字の民俗学 声の歴史学』思文閣出版  
由谷裕哉・時枝務編 2010 『郷土史と近代日本』角川学芸出版  
川田順造 1976 『無文字社会の歴史 西アフリカ・モシ族の事例を中心に』岩波書店  
森明子編 2002 『歴史叙述の現在 歴史学と人類学の対話』人文書院  
山口裕子 2011 『歴史語り的人类学 複数の過去を生きるインドネシア東部の小地域社会』世界思想社  
大場千景 2014 『無文字社会における歴史の生成と記憶の技法』清水弘文堂書房

### 2. 研究の目的

「日常実践において歴史とのかかわりをもつ諸行為」と定義される歴史実践は、地域や時代、そして専門家/非専門家といったアクターの属性を越えて普遍的に見られる社会・文化現象である。また、歴史実践は単なる「過去の回顧」ではなく、「過去との対話を通じて現在の現実世界を創造する行為」である。人びとはなぜ歴史を振り返るのか?なぜ歴史を語りたがるのか?本研究では歴史実践の契機や企図、願望、思惑、そしてその実践の技法、さらにそれが社会や個人に与える影響といった、歴史実践の民族誌的分析をまず行い、さらにパブリック・ヒストリーという観点から読み直すことによって、多様なアクターが社会に開きながら協働して、自己/他者のために、積極的に歴史実践をする可能性と課題について明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

(1)「公共の問題」や、民俗学・歴史学・社会学において歴史をめぐる社会实践に直接的、間接的に関わってきた本科研メンバーが、パブリック・ヒストリーの生成と深化に不可欠な重要課題に関し、フィールドワーク調査や文献調査に基づいて個別研究を行った。

(2)各メンバーの個別研究を統合し、インタラクティブに成果を共有し、各自の研究にフィードバックするために、定期的にワークショップ(研究会)を開催した(計 8 回)。なお、ワークショップは、パブリック・ヒストリーというコンセプトを学界に普及し、その研究成果を社会に広く還元するため公開とし、現代民俗学会等の学術団体と連携して共同開催した。

現代民俗学会第 33 回研究会「パブリック・ヒストリー 多様な歴史実践から生まれる開かれた歴史」、現代民俗学会、東京大学、東京、2016 年 9 月 10 日

現代民俗学会第 35 回研究会「民族文化映像研究所と姫田忠義の世界 歴史実践のなかのヴィジュアルティ」、現代民俗学会、上智大学、東京、2016 年 12 月 11 日

現代民俗学会第 43 回研究会「ヴァナキュラー文化研究の輪郭線 野生の文化を考える、野生の学問を考える」, 現代民俗学会、東京大学、東京、2018 年 9 月 16 日  
など

(3) 上記のワークショップ開催とともに、研究成果を学術界へ還元するため、日本民俗学会年会で特集のパネルセッションを組織した

「パブリック・ヒストリー 歴史実践の民俗学」, 日本民俗学会第 69 回年会、佛教大学、京都市、2017 年 10 月 15 日  
など

(4) さらに、これまでの海外での成果を吸収し、本研究を世界的な研究水準とすり合わせ、また、本研究の成果を発信するために、海外の学術集会に参加し、発表・共同討議を行い、それによってパブリック・ヒストリーの理論や論点を共有するとともに、今後の国際的な研究ネットワークを構築した

中国民間文芸家協会、中国伝統村落保護與発展研究中心他主催「中国伝統村落保護(鳴鶴)国際高峰論壇(International Summit Forum on Chinese Traditional Village Protection)」, 杭州湾環球酒店、中国・浙江省慈溪市、2016 年 4 月 26 日

上海大学社会学院系列講座 2016 年第 13 講総第 419 講「“歴史與民族誌講壇” 的第一講」, 上海大学、中国・上海市、2016 年 4 月 29 日

山東大学、韓国高等教育財団主催『山東論壇 2016』, 山東大学、中国・済南市、2016 年 10 月 22 日

Perspectives and Positions of Cultural and Folklore Studies in Japan and Germany (Deutsche Gesellschaft für Volkskunde, Folklore Society of Japan, International Symposium Meeting)(Invited lecture), Institut für Volkskunde/Europäische Ethnologie, Ludwig-Maximilians-Universität München, Munich, German, October 28-29 2016.

台湾・文化部文化資産局主催『2017 亞太無形文化資産論壇 前瞻教育與当代实践』, 台湾・台中市・台中文化創意産業園区、2017 年 5 月 11 日

南京農業大学、南京市文学芸術界聯合会主催国際シンポジウム『第二届“農耕文化遺産與現代社会” 學術検討会』, 中国民間文化伝承模範基地、中国・南京市、2017 年 9 月 23 日

中国民俗学会、中山大学非物質文化遺産研究中心、中文系主催国際シンポジウム『非物質文化遺産保護倫理問題国際検討会』, 中山大学、中国・広州市、2017 年 12 月 10 日

浙江師範大学非物質文化遺産研究基地主催国際シンポジウム『歴史民俗学與社会史：理論與方法 跨学科国際論壇』, 浙江師範大学、中国・金華市、2018 年 4 月 6 日

2019 年韓国実践民俗学会全国學術大会、東国大学、韓国・ソウル市、2019 年 2 月 16 日  
など

#### 4. 研究成果

本研究は、研究目的を達成するために、3 力年にわたって下記の 6 テーマの事例研究を、研究代表者と研究分担者、研究協力者が行った。

歴史叙述に関する事例研究 アカデミックの外の人びとによる歴史叙述

歴史継承に関する事例研究 「文化財」「遺産」をめぐる歴史継承

歴史利用に関する事例研究 災害後の復興活動における歴史利用

歴史編纂に関する事例研究 自治体史、字誌におけるアカデミックの外の人びとの歴史編纂

歴史構築に関する事例研究 環境保全の場における「共生」の歴史構築

歴史喚起に関する事例研究 慰霊による歴史喚起

さらに、パブリック・ヒストリーに関する理論研究を行った。メンバーは「種々の歴史系人文学を貫き、糾合する概念としてパブリック・ヒストリーをとらえる」という学術的観点から、民俗学や歴史学、文化人類学、社会学、宗教学など多様な分野の研究者をバランスよく配置した。また、本研究課題の究明には公共部門の専門家の参画が不可欠であり、研究協力者としてその参画を得た。なお、個々の研究は、各メンバーがすでに関与してきたフィールドや対象であるため、本研究は立案した当初の計画通りに進化した。その研究成果は個々の論文、口頭発表等で段階的に発表した。その最終成果は書籍として刊行予定であり、すでに執筆作業が終了し、現在編集中である(2019 年度刊行予定、勉誠出版)。

成果を取り纏めた同書籍において、各自が執筆した個別テーマは下記の通り。

[ 研究代表者 ]

菅 豊：パブリック・ヒストリーとはなにか？

[ 研究分担者 ]

北條勝貴：ありのままの事実 を支えるもの 近代日本における歴史実践の多様性

川田牧人：「歴史」する聖地創出

中澤克昭：プラクティカル・パストと日本史 中世歴史実践史ノート

宮内泰介：「八重子の日記」の歴史実践

市川秀之：滋賀県下の字誌にみる歴史実践

俵木 悟：歴史と芸 神楽の過去を発掘する / 演じるという歴史実践

西村 明：いまに生きる、いまに生かす歴史的空間における歴史実践 「オターン郷土誌家」を目指して  
加藤幸治：更地と工事現場からの文化創造と歴史実践 津波被災地における復興キュレーション  
〔研究協力者〕  
村上忠喜：民俗文化財に対する内部者の目線と外部者の目線  
塚原伸治：歴史を刻む音楽 ある祭り囃子の「成長」  
金子祥之：「歴史」を回す オビシャ行事とオニツキをめぐる歴史実践

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(総計65件)

陸 薇薇、菅 豊、「中国錦鯉」是如何誕生的？ 現実與虛擬空間中的“第三種文化”、民俗研究、査読有、2019年第2期(総第144期)、2019、126 - 135

菅 豊、フィールドワークの宿痾 公共民俗学者・宮本常一がフィールドに与えた「迷惑」、社会人類学年報、査読有、第44号、2018、1 - 27

菅 豊、民俗学者的田野介入與社会現実的再建構 通過田野調查構築現実、民俗研究、査読有、2017年第3期(総第133期)、2017、49 - 56

Yutaka Suga, Into the Bullring: The Significance of 'Empathy' after the Earthquake, *Fabula*, 査読有, 58(1-2), 2017, 25 - 38

<https://doi.org/10.1515/fabula-2017-0002>

宮内 泰介、社会のレジリエンスはどこから生まれるか 順応的ガバナンスの諸要件、応用生態工学、査読有、20(1)、2017、143 - 146

<https://doi.org/10.3825/ece.20.143>

Koji Kato, The Story of Cultural Assets and their Rescue: A First-Hand Report from Tohoku, *Fabula*, 査読有, 58(1-2), 2017, 51 - 75

<https://doi.org/10.1515/fabula-2017-0004>

菅 豊、公益與共益 從日本の“社会性” 伝統再構成看国家與民衆、民俗研究、査読有、2016年第6期(総第130期)、2016、49 - 54

Akira Nishimura, Are Public Commemorations in Contemporary Japan Post-Secular? *Journal of Religion in Japan*, 査読有, 5, 2016, 136 - 152

DOI:10.1163/22118349-00502004

〔学会発表〕(総計83件)

菅 豊、公共民俗学の可能性と課題 学問の公共性が問われる時代に民俗学者はどう対応するのか？ 2019年韓国実践民俗学会全国学術大会、2019

菅 豊、現代社会中的民俗学與歴史学的一種關連性 融合的公共民俗学與公共歴史学、浙江師範大学非物質文化遺產研究基地主催国際シンポジウム『歴史民俗学與社会史：理論與方法 跨学科国際論壇』、2018

Taisuke Miyauchi, Rural Community Sustainability and the Commons: A Post-Disaster Experience, XIX ISA (International Sociological Association) World Congress 2018 Toronto, 2018

Koji Kato, Build Back Better after the 3.11 Disaster: Efforts to Revitalize a Disaster Affected Region from the Perspective of a Museum Curator, スイス・チューリッヒ大学学術講演会, 2018

Koji Kato, Recovering Museum Collection Damaged by Tsunami Disaster and Revitalization of a Disaster-hit Area, スイス・チューリッヒ大学アジア・オリエント研究所国際ワークショップ, 2018

Koji Kato, How You Can Realize “Build Back Better” in the Field of Culture at the Tsunami-hit Area of the Great East Japan Earthquake? 国際人類学ワークショップ Disaster Perceptions and Responses in Times of Global Upheaval, 2018

Akira Nishimura, The Two Sources of the Postwar Commemorations for the War Dead in Japan, Exploring War, Memory and Religion: The Cases of Hiroshima and Nagasaki, 2018

菅 豊、東亞文化共同体中的非物質文化遺產相關問題、北京聯合大学北京学研究基地・One Asia Foundation 主催『北京学講堂：亞州文化共同体與首都比較』、2017

菅 豊、無形文化資産保存維護與公共民俗学 「共学」立場與方法之必要性、台湾文化部文化資産局主催『2017 亞太無形文化資産論壇 前瞻教育與当代实践』、2017

菅 豊、パブリック・ヒストリーと歴史実践 反復される多様な歴史活用とその現代的展開、日本民俗学会第69回年会、2017

Taisuke Miyauchi, Post-Disaster Co-Management of Natural Resources: A Case Study from Kitakami Area, Miyagi, Japan, 6th International Symposium on Environmental Sociology in East Asia, 2017

Satoru Hyouki, Considering the Role of Researchers at local Governments (as ‘Cultural Brokers’) in Japanese Cases of ICH, International Symposium on Global Perspectives on

Intangible Cultural Heritage: Local Communities, Researchers, States and UNESCO, 2017

Akira Nishimura, Residual Religiosity in Public Cenotaphs: Reconsidering the Separation of Church and State in Postwar Japan, CJRC Lecture Series, 2017

Akira Nishimura, Non-Denominational Deities for the Lasting Peace? : Reconsidering the Religious Representations in the Public War Commemoration in Postwar Japan, 2017

Yutaka Suga, Quiet Violence: Urban Rivers, Hidden Walls, and Vulnerable Populations in Japanese Society, Deutsche Gesellschaft für Volkskunde, Folklore Society of Japan, International Symposium Meeting, "Perspectives and Positions of Cultural and Folklore Studies in Japan and Germany," 2016

菅 豊、パブリック・ヒストリーとは何か？ 歴史実践研究に向けての基本的枠組み、現代民俗学会第33回研究会、2016

〔図書〕(総計46件)

加藤 幸治、社会評論社、文化遺産シェア時代：価値を深掘る“ずらし”の視角、2018、191

俵木 悟、勉誠出版、文化財/文化遺産としての民俗芸能-無形文化遺産時代の研究と保護-、2018、320

中澤 克昭、山川出版社、肉食の社会史、2018、419

宮内 泰介、岩波書店、歩く、見る、聞く 人びとの自然再生(岩波新書)、2017、224

加藤 幸治、社会評論社、復興キュレーション 語りのオーナーシップで作り伝える“くじらまち”、2017、255

中澤 克昭、吉川弘文館、真田氏三代と信濃・大坂の合戦、2016、160

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：市川 秀之

ローマ字氏名：ICHIKAWA Hideyuki

所属研究機関名：滋賀県立大学

部局名：人間文化学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：80433241

研究分担者氏名：宮内 泰介

ローマ字氏名：MIYAUCHI Taisuke

所属研究機関名：北海道大学

部局名：大学院文学研究院

職名：教授

研究者番号(8桁)：50222328

研究分担者氏名：川田 牧人

ローマ字氏名：KAWADA Makito

所属研究機関名：成城大学

部局名：文芸学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：30260110

研究分担者氏名：中澤 克昭

ローマ字氏名：NAKAZAWA Katsuaki

所属研究機関名：上智大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：70332020

研究分担者氏名：北條 勝貴

ローマ字氏名：HOJO Katsutaka

所属研究機関名：上智大学

部局名：文学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：90439331

研究分担者氏名：西村 明  
ローマ字氏名：NISHIMURA Akira  
所属研究機関名：東京大学  
部局名：大学院人文社会系研究科  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：00381145

研究分担者氏名：加藤 幸治  
ローマ字氏名：KATO Koji  
所属研究機関名：東北学院大学  
部局名：文学部  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：30551775

研究分担者氏名：俵木 悟  
ローマ字氏名：HYOUKI Satoru  
所属研究機関名：成城大学  
部局名：文芸学部  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：30356274

## (2)研究協力者

研究協力者氏名：塚原 伸治  
ローマ字氏名：TSUKAHARA Shinji

研究協力者氏名：村上 忠喜  
ローマ字氏名：MURAKAMI Tadayoshi

研究協力者氏名：金子 祥之  
ローマ字氏名：KANEKO Hiroyuki

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。